

コロナ禍になる前の話だが、映画館に洋画を見に行くと、吹替版ではなく字幕版のほうを見るようにしていた。少し前までは、字幕の翻訳といったら戸田奈津子さんと決まっていた。日本には、映画の字幕翻訳者は戸田さんしかいないのかと思うほどだった。

戸田さんは、これまでに約1500本もの洋画で字幕を担当してきている。意外にも、出世作となった「地獄の黙示録」を手掛けたのは43歳のときだった。ということは、約20年間に及ぶ長い下積み生活があったということになる。

戸田さんは、子どもの頃から、絵本に始まりあらゆる本を読み漁っていたそうである。中学、高校の頃は、図書室に入り浸りで、友人からは図書室の本を全部読んでいたと言われたほどだった。そこで、戸田さんは、“言葉に対する貯金”をすることができたと言っている。貯金できたのは、多くの本を読んできたおかげだという。

字幕の仕事は年に1、2本で、鳴かず飛ばずの状態が何年も続いた。それでも辞めようとは思わなかった。他に魅力のある仕事は何も見つからなかったし、自分にはこの道しかないと思っていた。人間の感情の中で「好き」という感情ほど強いものはない。戸田さんは、そう言う。

字幕翻訳は限られた文字数の中で、台詞の意図を的確に伝えることになる。字幕翻訳には、きちんとしたプライオリティ（優先順位）がある。まずは映画を観ている人がストーリーをきちんと把握できるものでなければならない。加えて、ユーモアや微妙なニュアンスがあれば、それを加味しなければいけない。人物のキャラクターも伝えなくてはならない。それを十文字なら十文字の中に詰める。それが字幕だと戸田さんは言う。

当然、機械的に直訳しても、少しも面白いものにはならないし、エモーション（感情）を揺さぶられてこそ、生きた字幕と言える。英語そのものは日常会話である。したがって、限られた字数でそれを日本語としていかに表現できるかが勝負となる。字幕翻訳の80%は日本語力だと言う。ゲーテは「制限の中において初めて名人はその腕を示す」と言っている。

この20年の間に若い人たちの間で「字幕離れ」が進んでいるそうである。吹替版を好む観客が増えている。映画が字幕版と知った観客が「普通の映画はやっていないんですか」と尋ねたという話もある。映画会社から「若い人は“安堵”という言葉が読めないから“安心”に変えてほしい」と言われて、戸田さんは強く反発したそうである。「安堵と安心はニュアンスが違う。それがどうして分からないの」と。

戸田さんによると、日本は世界でも珍しい字幕国なのだそう。外国映画を字幕で観る習慣がなぜここまで日本で定着したのかと言えば、一つには日本人の識字率が高かったこと。もう一つは本物志向が強いことだそうである。

戸田さんは、子どもたちに数字や情報を与えるよりも、教養を培うことのほうが大事だと言っている。今の時代、スマホ1台あればどんな情報でも手に入る。だが、教養は違う。一度身についたら一生離れることがない。一番手軽なのは本を読むことである。私たちが人生で体験できるものは限られている。読書によってイメージーションを磨いていくことは大事である。

人間は言葉があるから生きていける存在である。人間の思いや感情を表現する手段で最も大切なものが言葉である。いい字幕というのは、言葉が映画と溶け合って、映画を観終わった人たちに、字を読んだという意識すら起こさせないような字幕なのだそうである。そういう透明のような字幕翻訳を戸田さんは目指している。

私が映画館で「地獄の黙示録」を観たのは、高校2年生のときだった。何だかむずかしい映画だったが、少しだけ大人に近づけた気がした。あの頃は、どんどん“言葉の貯金”をしているときだった。貯金はこれからでも遅くはない。地道にコツコツとやっていくとするか。